2014年11月15日発行　　発行責任者：立石美佐子

NPO法人 北摂こども文化協会
Hokusetsu Children Culture Association

VOL 45

ハックルベリー

Hackle Rally

●北摂こども文化協会事務局
〒563-0024　池田市鉢塚3丁目4番13号
TEL:072-761-9245　FAX:072-761-9244
hokusetsukodomo@wombat.zaq.ne.jp

●北摂こども文化協会豊能事務所
〒563-0101 豊能郡豊能町吉川336-1
TEL:072-738-3435

●北摂こども文化協会西天満事務所
〒530-0047 北区西天満3-8-4朝日プラザ西天満101
TEL:06-6948-5380

Home Page URL http://hokusetsukodomo.com/ ※検索サイトからは、「北摂こども」で検索！

2014年10月26日　水月ハロウィンフェスティバル（水月児童文化センター）

Contents もくじ

子ども時代の経験は老いてからの夢袋 ―― 2・3
子どもに必要な教育環境 ―― 4・5
子育てエッセイ：やまGの育G日記 ―― 6
コラム☆おすすめの本／エッセイ ―― 7
イベント・行事案内／入会案内／編集後記 ―― 8

子ども時代の経験は、老いてからの夢袋

人は生まれてから幼少期を経て青年となり、伴侶を得れば家庭を築き子どもを生み育てます。

その子どもが成長し大人になり、また赤ちゃんを生み、やがて老人になるわけです。このサイクルは途切れることがありません。人はみな老いるわけですが近年、日本でも高齢化が急速に進んでいます。

2010年では23%だった高齢化率が、2013年では25.1%に、2060年には39.9%となり、2.5人に1人が65歳以上だそうです。私が住んでいる地域は、なんと高齢化率45%です。

そして75歳以上の後期高齢者ともなると、物忘れが激しくなり、ぼける可能性も高くなるわけです。でも、これは人類の営みとして至極当然のことです。昔から「歳をとってぼけたなぁ」なんて当たり前に言っていましたよね。これは蔑んでもいないし、歳をとったら物忘れやぼけることだって当然のこと、そりゃそうだと受け止めていました。

私の姑も現在93歳、体はいたって元気です。よく食べよく寝ますが、同じことを何べんでも言います。

「私、歌謡曲好きやねん」2分も経たない内に「私、歌謡曲好きやねん」と繰り返しています。でもその顔は満面の笑顔です。世界一幸せそうです。

娘の頃の話もよくでてきます。和裁のお稽古で、いつも褒められたこととか、しっかり者のお母さん（夫のおばあちゃん）の話をする時も、とても誇らしそうです。「私おとんぼ（末っ子）だったから、お母さん子だったんよ」またまた世界一幸せそうです。さぞかし可愛がられてきたのでしょうね。

そういえば83歳で亡くなった私の母も、現実を忘れた中でも昔の話は鮮明に覚えていました。病院に訪れた私と一緒に、童謡を歌い続けたことなど懐かしく思い出されます。私は曖昧だった歌詞の2番3番もしっかり覚えていたのには驚かされました。人は高齢になって「ぼけ」た時、過去の楽しかった思い出の中に浸るのだそうです。

それならば、人が子どもである時に、たくさんの体験をして、たくさんの仲間がいて、たくさんの喜びに包まれることは、老いた時の夢袋をいっぱい膨らませることなんだなって思います。

当協会は、「子ども若者自立支援」も事業の大きな柱としています。子ども・若者にいろいろな体験事業を提供し、夢や希望につなげ、主体的かつ自分らしく生きられるよう支援を目指していますが、実はこれ、高齢者になったときの夢袋づくりでもあったんですね。

褒められた経験、認められた経験、嬉しかったり楽しかったりの経験が、高齢者になって当たり前にぼけた時の心の居場所になるんですね。

母親と過ごしたユーモラスで豊潤な日々を漫画に描き続けた岡野雄一さんは、濃密な介護の日々を通して感じられたことをこのように綴られています。

「人間が生きているって、すごいなと思うんです。人に迷惑もかけるし、かけられるし、心配もかけるし、かけられる。死んでしまったらそれは全部なくなるんですよね。僕は今、生きていることが一番大事なんだと思っています。」

生きていく中で、人に迷惑をかけてしまうことは多々あります。それが子どもであればなおさらです。家族の、社会のお世話を受けて成長していくのですから。けれど反対に、子どもたちの存在そのものが社会の大きなエネルギーです。どの子も等しく愛しい社会の宝です。子どもの笑顔は健全な社会の表れです。豊かな子ども時代を過ごせるようみんなで見守り、支えていきましょう。

老いの領域に入った私ですが、子ども時代の豊かな日々の経験が、老いた時の夢袋であるなら、「老いも怖がるに至らず」の気持ちになれるのでした。

当協会が行っている事業の一つひとつが、子どもたちの心をホンワカ楽しくする内容となるよう計画しています。

豊能町の山のフィールドで展開している「ひと山まるごとプレイパーク」は子どもも大人も心が癒される空間となっています。

子どもたちは人形劇も大好きです。古い付き合いの人形劇団クラルテさんでは、かわいい作品がたくさんあります。お正月のお話、山のお話、川や海のお話等、当協会もずいぶんたくさんの作品を地域のみなさんと一緒に鑑賞してきました。おばあちゃんと孫の交流をほほえましく表現した人形劇も好評でした。

子どもの体が成長するのに、滋養あるおいしい三度の食事をしっかり摂ることが必要なのと同様に、心が豊かに成長するのには遊びや文化・芸術を浴びるほど経験することが大切なんですね。これが当協会の中心となる活動主旨であり、当協会が推進する「子どもの権利条約」第31条の「もっと遊びと、文化芸術を子どもたちに！」です。

子どもの権利条約第31条の実現は、実は老いてからの夢袋につながっているなんて、なんと素敵な一石二鳥なんでしょう！

（理事長・立石美佐子）

子どもに必要な教育環境と学び

今号は子どもに必要な教育環境について考えてみたいと思います。なぜなら今、学校において子どもを取り巻く環境が変わりつつあるからです。

大阪市教育委員会は来年度より「特別指導教室」を新設し、「悪質な問題行動を繰り返す児童・生徒」を対象に、在籍する市立学校から原則４週間（延長も可能）引き離し、「集中的に指導する」ことを決めました。新聞報道※によると、悪質な問題行動とは「校内暴力、非行、著しい授業妨害」や「教師らの指導に従わない態度が続く」場合を指しており、大阪市教育委員会の狙いは第一に問題行動を起こさない子どもたちの学習権の保障（落ち着いた環境で教育を受ける権利を守る）であり、第二に問題行動を繰り返す子どもへのケアの充実にあります。(※朝日新聞デジタル版６月9日・10日・10月17日付け)

ケアに関して言うと、具体的には「問題行動の対応に豊富な経験や心理学など専門的知識がある教職員らを配置。社会や学校でのルールの大切さを教え、他者を思いやる態度を育てることに重点を置く」とのことです。橋下市長も「『（個別指導では）必要があれば、生徒一人に複数の教員をつけて指導するような手厚い体制をとるべきだ』と注文を付け」ているそうです。

この対応策において評価できる点は、「問題行動の対応に豊富な経験や心理学など専門的知識がある教職員らを配置」する必要性が認められた点にあります。別室指導を要するような特別な課題に取り組むためには、やはり経験豊富な知識や力量のある教職員を必要な人材として配置することが公教育の運営を司る行政の義務だと思います。

今、学校現場では、学校ボランティア事業やスクールサポーター（サポート）事業といった名称で、教職を志す学生を受け入れ、彼ら彼女らに実習の機会を提供しています。学生の実践力向上に一役かっているわけですが、学生に与える役割は教室を飛び出す児童・生徒の後追いや同伴、授業についていけない児童・生徒の横について適宜学習支援をすることなど。

筆者は勤務大学においてこの関連の業務に携わっているのですが、学生の報告で多く出される実情が、発達障害など特別な支援を要する児童・生徒の対応を任されたが、専門知識も経験値も少ないために、どのように対応したらよいのか分からず悩む、自分の対応が正しかったのか疑問や不安が残る、というものです。

予算と人手が足りないからボランティアを補充し、何とか教育を“つなごう”という算段であるならば、児童・生徒の教育は守られているとはいえません。確かに教職を目指す学生に対して実習の場を提供することは必要と思いますが、学生の力量形成の機会保障と児童・生徒の教育の質保証は別の次元の話です。このような問題を感じてきたために、今回の大阪市教育委員会が出した「力ある教職員の配置」の方針は評価できるのです。（当然、大学側にも学生指導の責務があり、勤務大学ではフォロー研修を実施。）

一方で、懸念を感じる点が、別室へ隔離した状態での「手厚い体制」による指導が、ケアではなく単なる管理の強化と教化（固定した権威にもとづく模範や規則にしたがって個人の行動を統制的に形成しようとするはたらきかけ）になってしまわないかという点です。懸念を感じさせる根拠に「社会や学校でのルールの大切さを教え、他者を思いやる態度を育てることに重点を置く」という市の方針が挙げられます。この方針からはルールを尊重できていないから、他者への思いやりに欠けているから問題行動を起こすと、市教委が理解していることが伺えます。しかし児童･生徒が問題行動を起こす理由は本当にそうなのでしょうか。

夏休み中に開かれた教員を中心とする教育実践研究会に筆者は共同研究者として呼ばれ参加してきました。そこで報告されていた実践の一つに、「暴れる、授業妨害、暴言、暴力、自分勝手ととらえられる言動を繰り返す児童A」に対応しながら「学級作りを進めていった実践」がありました。実践者の担任B先生は、Aの胸の内にある「認めてほしい」「僕もやりたい」という気持ちを信じ寄り添い、それらの思いを暴力ではなく言葉による表現によってクラスメイトに伝えていく指導を粘りよく続けてこられ、少しずつAが成長していった様子を報告して下さいました。そんな担任のAに対する姿勢はクラスメイトにも伝わります。クラスメイトに我慢を強いてばかりではおかしい、Aもみんなもそれぞれに存在が尊重されなければと、クラスメイトのAに対する不満や言い分にも耳を傾けようと学級会を開いたところ、意外にもクラスメイトはAのがんばりを認める発言をしたそうです。クラスメイトは問題行動を起こすAのことを共に学び合う仲間として受け入れていたのです。Aは気持ちを言葉に変えて伝えることを学び、同時にクラスメイトもまたAを通じて「（学校）生活を共にする他者を認める」という学力以外の人として生きるために大切なことを学習していました。

別の報告をした中学校教諭C先生は、「勤務先は低学力校で問題行動を起こす生徒がたくさんいるけれど、そんな生徒たちは『目標や夢を失っていたり、進路に向かうパワーが無かったり』する。その背景には『いじめや不登校の経験、不安定な家庭生活、ゆえの不安定な精神状況』がある」と分析。C先生は「失ったパワーを回復できるようなクラス作り」を目指し、クラス単位で取り組む学校行事を活用します。生徒が自分たちの課題を見つめ乗り越えていく力を付け、お互いを認められるようになるような実践に励んでおられました。

現場の先生方が教えて下さったことは、問題行動を起こす児童･生徒の胸の内にはクラスメイトの一員として共に成長したいという気持ちがあるということや、生き辛さを抱えた日常の中で生きていることも理解した上で乗り越える力をはぐくむ必要があり、そのために自己や他者への信頼を高める教育が必要であるという点でした。

“共生”と“信頼”が鍵になっている今、4週間もの隔離指導が、本当に有効に機能するのか、むしろ人間不信や自己への烙印を生んでしまわないか、懸念が残ります。

（理事・立石麻衣子）

子育て
エッセイ

やまGの育G日記　その２０　～通った道ではあるけれど～

子どもがうまれた時から、いつか来るだろうと思っていた日がやって来た。自分もやらかしてきたことなので、容易に想像できたものの思いのほか早く来てしまった。

娘は学校から家の近くまで帰ってくると「おかあさーん！」と大きな声を出して、自分が帰ってきたことを知らせてくる。

家の中にいても聞こえる声で、「おかあさーん！　おかあさーん！　おかあさーん！」とどんどんボリュームアップし、ご近所に対して恥ずかしい思いである。

10月のある日、僕は仕事が休みで、嫁さんと息子と家でのんびりしていると、遠くの方から「おかあさーん！（キャン！）　おかあさーん！（キャンキャン！）　おかあさーん！（キャンキャン！）」という娘の声プラス何かの声が。

「連れて来とる！　確実にいぬ的なものを連れて来とる！」と慌てだす嫁さん。

僕も嫁さんも動物嫌いではなく、むしろ好きな方だが自分で飼うとなると話は別である。

急いで玄関に出ると、それはそれはちっちゃくてかわいいチワワちゃんが。

「今日からこの子一緒に住むから。一緒のおふとんで寝るねん」と娘はすっかりその気になっていた。チワワちゃんのうるうるした大きい瞳、プルプル小刻みに揺れるしっぽ、人懐こく足元にすりよる姿は反則級にかわいかった。

なんとか踏みとどまり、うちでは飼えないと伝えるやいなや「ふんぎぃぃ～！！」と、のたうちまわり小学1年生の声とは思えない断末魔が町内に響いた。

幸いそのチワワは登下校の付き添いボランティアの方が、その日仕方なしに連れてきていたようで、おもいっきり興味を示した娘のために一緒に家まで来てくれたのだった。

娘を落ちつかせ事情を説明し、生き物を飼うことの大変さなどを伝えると、娘は渋りながらも受け入れた。

「私が3年生になったら飼ってあげるからね」とさよならしていたが、僕の説明をどう理解すればそうなるのか謎である。

くり返すが僕は動物が好きで、ペットに断固反対ではない。実際僕も嫁さんも子どもの頃から犬や猫に囲まれて暮らしてきた。

しかし残念ながら僕は動物に好かれないようである。大学生の時、道端でずぶ濡れになっていた野良猫の赤ちゃんを連れて帰り、親の反対を押し切ってまで飼ったのだが、見事に僕にだけ懐かない。既に飼っていた犬にさえ懐いたのに、僕にだけ懐かない。

抱っこするのは夢のまた夢、撫でようとしただけで「フゥゥゥ！」と毛を逆立てて警戒。そんな感じなのでもちろん僕の部屋にはいっさい寄り付かなかった。ところが一度だけ、どういうわけか部屋に入れてとドアをカリカリしてきたことがあった。

今までのことは水に流してやろうと懐の深い感じで、「なんや♪　どうしたんや♪」と迎え入れてやると「んぷっ…　っおぷっ…　ふんげぇぇぇぇ！」と壮絶な嘔吐をし「カハッ、カハッ」と喉を鳴らしながら去って行った。

振り返るとあまりろくな記憶はないものの、生き物を飼う経験は子どもにとって大きく、色々な思い出が作られる。僕にとって初めて直面した「家族」の死は飼い犬であったし、子どもながら形容しがたい喪失感をおぼえ、それを受け止める心を作れた。

我が家が動物を飼う日がくるのかどうかは分からないが、少しだけ心の準備をしておこうと思う。

（理事・山路知之）

おすすめの絵本

秋も深まってきました。山々や木々も色づいて、色彩豊かな季節ですね。

今回は、色をテーマに絵本のご紹介をします。秋の夜長、楽しいひとときをお過ごしください。

『まほうのえのぐ』
林明子作・絵　福音館書店

はじめて絵具を使って絵を描いたのはいつでしたか？よしみはお兄ちゃんにえのぐを貸してもらったのです。森の動物たちが描く絵はどんな絵？　動物たちの表情、森の佇まいも絵本の隅々まで楽しめる一冊です。

『いろいろへんないろのはじまり』
アーノルド・ローベル　訳まきたまつこ　冨山房

世界は昔、灰色だけでした。そんな世界に魔法使いが色を作ったのです。でももし世界がどれか一色だけの世界だったらどうなるでしょうか。色んな色があって楽しい。色んな人がいてこそ素敵な世界なのですね。

『ふくろうのそめや』
奥山多恵子　文・絵　福音館書店

昔、カラスが真っ白な体を自慢にしていた頃、梟は染屋をしていました。鳥たちは、梟に美しい色や模様を染めてもらいました。カラスは誰よりも美しくして貰おうと梟に注文するのですが・・・。日本の民話です。他の出版社でも違う作家作品が出ています。

『わたしはあかねこ』
作サトシン　絵　西村敏雄　文溪堂

真っ白な母猫と真っ黒な父猫から生まれた赤い猫のお話。自分とは何か。考えさせられる作品です。わかりやすいけれど大人向けかと思います。

『じぶんだけのいろ』
レオ・レオニ　作・絵　谷川俊太郎　好学社

自分の「色」って何色なのでしょう。カメレオンの悩みは皆のように自分の色がないこと。周囲の情景に合わせて色が変わってしまう。不安定で淋しかったカメレオンが信じられる仲間をみつけたことで変わります。豊かな美しい色彩と深いテーマで幅広い年齢層に楽しんでいただけます。

（会員・尾﨑望）

一本松のヴァイオリン

東日本大震災の瓦礫を集めてヴァイオリンを作ったというニュースを聞いた事がありますか。ヴァイオリンの裏板にあの奇跡の一本松の絵が画かれています。

今ではヴァイオリンだけでなくビオラやチェロも複数台出来ていて、その楽器を使ったコンサートを私の友人のヴァイオリン弾きがする事になりました。

そのコンサートで、一本松の事や楽器の出来たいきさつを演奏と歌にしたいから脚本書いてと、ヴァイオリン弾きに言われ、断ると復興を支援していないと思われそうなので引き受けました。

一本松は東北のどこにあって、どうなっているのか、テレビの画面を通してニュースを聞いているだけでは話はできません。ええいと思い切って、自費をはたいて、一泊二日で雪の陸前高田へ行きました。

行ってびっくり、見て仰天でした。一本松のあった陸前高田の松原は長さがなんと２キロで、7万本もの松があったのに、一本しか残らなかった。ちょっと想像してください。浜寺公園の松林が一瞬に消えた所を。浜寺公園を知らないか。

陸前高田の松原は400年かけて、人々が植えたりして７万本になり、年間100万人の人が集い憩う場所になっていたそうです。それが一瞬で消えた、自然の力はおそろしいですね。

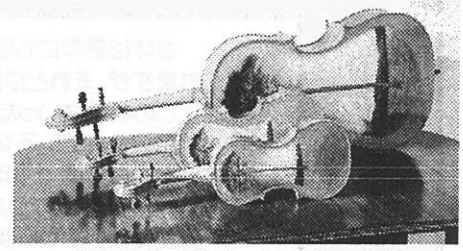
先日の御嶽山の爆発もびっくりしましたが。とにかく自然はものすごい力をもっているようです。

高田の松原の400年の歴史と、無数のドラマを刻んだ文化を津波が持ち去ったけれど、その歴史と思いを拾い集めて楽器を造りコンサートをするという素晴らしい事を手伝わせてもらっています。

その楽器は今複数台になり、世界中の人に弾かれ、聞かれているそうです。
ところでこのヴァイオリンの名称は「TSUNAMI VIOLIN」だそうです。もっとええ名前ないのと聞いたら、TSUNAMIの一言であの大震災が、世界中で通じると聞いて、気持ち複雑になりますね。

コンサートは10月18日でしたが、ヴァイオリン弾きがまたしたいと叫んでいますので、いつか聞いて下さい。

写真提供/（財）Classic for Japan



TSUNAMI　VIOLIN

（人形劇団クラルテ・松本則子）

イベント・行事案内

12月14日(日)

in 水月児童文化センター

幼児のかわいいお歌の発表やクリスマス恒例ビンゴ大会など盛り沢山！
みんなでクリスマスをたのしもう！

会員随時募集中!!

「もっと自分らしく」を合言葉に、北摂こども文化協会は活動しています。

年会費：◆正会員（総会議決権あり）10,000円
◆賛助会員　個人　一口　3,000円
団体　一口　5,000円
法人　一口　10,000円

お問い合わせ・お申し込みはこちらまで

●北摂こども文化協会事務局
TEL:072-761-9245
FAX:072-761-9244
E-mail:hokusetsukodomo@wombat.zag.ne.jp

第14回 大阪高校生演劇フェスティバルin池田

とき＝2015年1月31日（土）
場所＝池田市民文化会館小ホール

とんど焼き（豊能町）

西地区
とき＝2015年1月17日（土）
※雨天中止
場所＝東ときわ台小学校グラウンド

東地区
とき＝2015年1月18日（日）
※雨天決行
場所＝豊能町立スポーツ広場

編集後記

今年は例年にも増して台風の猛威にさらされました。通常、台風といえば18号とか19号とか番号で呼ばれますが、それとは別に固有名詞もつけられています。

この名前はいったい誰が付けているのか調べたところ、複数の加盟国からなる台風委員会によって、予め用意されている140個の名前が発生順につけられているそうです。

台風は年間で平均25個発生しているらしく、およそ5～6年で台風の名前は一巡しているそうです。

一巡するとまた1から同じ名前を付けていくそうですが、大きな災害をもたらした台風は、その名前を以後使わないようにすることがあるそうです。

今後そんな台風が発生しないことを祈るばかりです。（山）